

フィールドワークによる

地理歴史連携授業の取り組み

井川 一実・島津 聡

はじめに

本稿では、地歴連携によるフィールドワーク実践が、汎用的な能力としての地理的思考力、歴史的思考力を身につけさせ、それらを統合して考察する力の育成に寄与する可能性を検討したい。

教科や科目を横断する学習活動は、高校生の知的好奇心を刺激し、その成果を新たに出会った課題の解決に応用する姿勢を育むものである。同時に知識や技能の活用を通して様々な方法から導き出される像の違いや共通点を探り、整理することは物事を多面的に把握する力を向上させ、探究的な学習活動を充実させる上でも欠かせない。近年の高大接続をめぐる議論においても重要性が指摘されている点である。⁽¹⁾

そのような活用型の学習のあり方を示し、分析や解釈の力を

活用することの魅力を伝えるべく、本校の地歴公民科では「東京を歩く」と題して地理担当教員である井川と日本史担当教員の島津による連携学習を実施している。

一 「東京を歩く」と地理・日本史のカリキュラム構成

本校では、一学年で必修として地理B・日本史Bを各二単位、三学年で必修選択または自由選択として二から六単位を設定している。この中で「東京を歩く」は夏期・冬期・春期の各休業期間中に一回ずつ、希望者申し込みによる特別講座として実施している。

この講座では、午前中に校内で地理と歴史の講義をそれぞれ九〇分程度実施し、午後からフィールドに出て実地見学を行う形式をとっている。地図や史料等を用いた概要把握は、基礎理解を共有する学習集団を形成し、現地での考察を深める上で肝要である。一方で地形の見方や史跡・文化財の観察の方法、関連するエピソード等の個別具体的な内容については現地で行うことで、生徒による自然な気づきを生かし、講義で獲得した概念的知識を活用する面白さを味わわせるように心がけている。

二 実践事例

(1) 日野の自然と人

①講義 地理分野

日野は、日野宿を中心に発展した地域であり、昭和一〇年代以降日野五社と称される大規模工場が相次いで立地、高度経済成長期以降は住宅地としての開発が急激に進んだ。講義ではこうした発展を支えた自然的、社会的条件を、迅速測図や旧版地形図を用いながら考察した。日野は、自然的条件としては日野台地と多摩川・浅川の両河川が、社会的条件としては甲州街道や中央本線、そして何よりも新宿からおよそ三〇キロメートルという距離が大きな影響をもたらしてきた地域であり、そうした立地条件の中での地域の変容についての理解を深めた。

②講義 歴史分野

日野に対する生徒の認識は、甲州街道の宿場町や新選組の隊士と縁のある地域といったものである。こうした既有的知識への問いかけからスタートして、生徒とともに史料を読解しながら地域史の考察を行った。

堅穴住居跡や横穴墓の遺構豊かな日野は、地形と考古遺跡の関係を理解する上で好都合である。平安時代には摂関家領・舟木田荘の一角をなし、後には武蔵七党の一つである西党の祖と

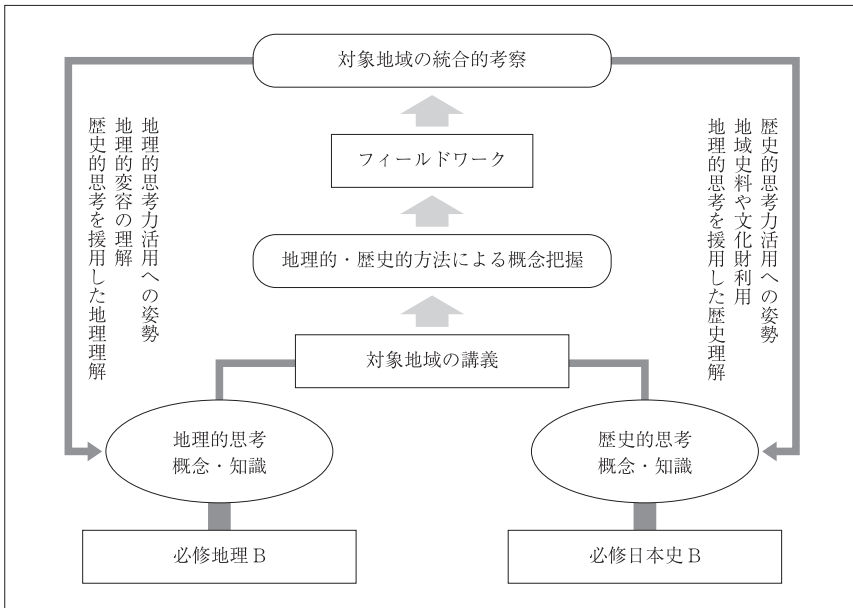


図1 「東京を歩く」と地理・日本史のカリキュラム構成

「東京を歩く」講座一覧

テーマ	地理分野	歴史分野
日野の自然と人	《講義内容》 ・日野の地形（日野台地、多摩川・浅川） ・用水路のある風景（日野用水、向島用水等） ・甲州街道と中央本線のルート選定 《主な配布地図・使用文献》 ・明治迅速測図（明治15年） ・旧版地形図（明治39, 昭和5, 30, 41, 60年） ・「水都日野 みず・くらし・まち 水辺のある風景日野50選」(日野市ホームページ)	《講義内容》 ・日野の遺跡と開発 ・近世の宿場経営と民衆負担 ・街道と信仰・新選組 《主な使用資料》 ・甲州道中分間延絵図 ・『武蔵名勝図会』 ・『新編武蔵風土記稿』 ・武州多摩郡日野本郷銘細帳下書控
国分寺・府中の地形と歴史	《講義内容》 ・国分寺・府中の地形（武蔵野台地武蔵野面、立川面） ・国分寺崖線と湧水 ・都市的施設の立地（東芝工場、刑務所等） 《主な配布地図・使用文献》 ・明治迅速測図（明治15年） ・旧版地形図（昭和14, 29年） ・杉谷隆他『風景のなかの自然地理 改訂版』（古今書院, 2005年）、道家剛三郎『東京の坂風情』（東京図書出版会, 2001年）	《講義内容》 ・考古遺跡の分布と湧水・段丘 ・古代律令国家と武蔵国府遺構 ・奈良時代の政治史と武蔵国分寺遺構 ・近世の交通制度と宿場町 ・近代の記録写真と府中周辺の変化 《主な使用資料》 ・甲州道中分間延絵図 ・『武蔵名勝図会』 この他、発掘調査報告書等
絹の道と多摩丘陵の自然と開発	《講義内容》 ・多摩ニュータウンの開発と緑地保全 ・谷戸の地形と利用、片倉城址の立地と地形 《主な配布地図・使用文献》 ・明治迅速測図（明治15年） ・旧版地形図（昭和20, 45, 平成6年） ・『ひなたブック 松木日向緑地ハンドブック』（首都大学東京） ・「多摩ニュータウン地区の人口動向」（東京都ホームページ）	《講義内容》 ・開国と浜街道の形成 ・浜街道成立前後の様子の比較 ・生糸商人の盛衰と浜街道 ・外国人の見た浜街道と文化の往来 《主な使用資料》 ・『新編武蔵国風土記稿』 ・武蔵国多摩郡村明細帳 ・横浜周辺外国人遊歩区域図（横浜開港資料館蔵） この他、片倉城絵図、F・ベアットの幕末期写真
江戸城とその周辺の地形と歴史	《講義内容》 ・江戸城の地形 ・江戸のまちづくりと地形改変 ・江戸の拡大 《主な配布地図・使用文献》 ・大江戸地理空間図（嘉永3～慶応4年） ・天保御江戸大江図（天保14年） ・御曲輪内大名小路絵図（慶応元年） ・麹町永田町外桜田絵図（元治元年） ・鈴木理生文・東京にふる里をつくる会編『千代田区の歴史』（名著出版, 1978年） ・鈴木理生『幻の江戸百年』（筑摩書房, 1991年）	《講義内容》 ・江戸城石垣と大名統制 ・東京駅周辺の近代建築 ・近現代政治史と霞ヶ関・永田町 《主な使用資料》 ・江戸城周辺石垣遺構の調査報告書 ・築城普請関連史料 ・『原敬日記』 ・占領期の記録写真・映像視聴

なった日奉氏が土着した。後北条氏支配下では日野用水の開削が行われ、後に日野水郷ともよばれる水田風景を現出させた。

江戸時代に幕府の直轄領となり、甲州街道の宿場が整備されたことにより本格的な発展の時代を迎えた。

延享三（一七四六）年の「武州多摩郡日野本郷銘細帳下書^③」には、甲州街道の宿場町である日野の実態が示されている。

参加者は一年生と受験を控える日本史選択者の三年生であったが、学習の進んだ三年生が、江戸時代の交通や諸役等の既習の知識・理解と結びつけ、伝馬役や助郷負担、参勤交代経路としての利用が宿場町経営の基盤になることに気づき、知識を確認、応用して一年生に説明する場面が見られた。史料を中立ちにして異年齢間での学び合いが生じていた。

③フィールドワーク

日野台地上に位置する学校を出発し、自動車工場や機械工場等の台地上の土地利用を確認しながら進んだ。多摩川を望む台地端からは、多摩川の低地を見下ろしながら、旧日野宿を含む日野市街の立地について観察を行った。また、台地上と多摩川・浅川の低地での農業的土地利用の差異にも注目した。同時に、考古遺構の分布に注目し、段丘上に縄文時代の集落遺構が、段丘崖に古墳時代の横穴墓が見られること等を確かめ、その理由を考察した。

武蔵野の雑木林の面影を残す段丘崖を下り、日野市内を流れる用水に注目した。日野市内を流れる用水には、多摩川と浅川、さらには日野台地の崖下の湧水を水源とするものがあるが、それらの水源を利用した用水路が都市化が進んだ現在でも、大部分は開渠のままで年間を通して通水され保全されている。こうした水都日野を今後どのように維持していくかについても、現地での観察を行いながら考察した。

道中には庚申塔をはじめとして石仏や石碑があることから、甲州街道の往来と庚申講や富士講といった庶民信仰の関係、文化財の基本的な見方や寺院建築の見方等の解説を行った。また、旧甲州街道に沿って、保存された日野宿本陣の建築や資料館、高札跡を見学し、近世の交通とそれを支える日野宿や制度的に結びつけられた周辺の村落の広がりについても考察した。



図2 石仏や石碑を観察・分析する生徒

(2) 絹の道と多摩丘陵の自然と開発

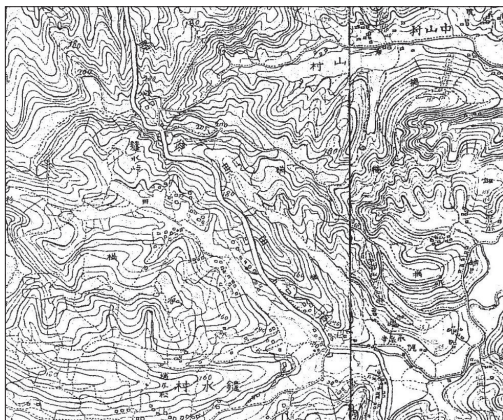
① 講義 地理分野

多摩ニュータウンの開発は、丘陵地の尾根を削った土砂で谷戸とよばれる谷を埋め立てて造成されることが多かったため、開発以前の地形図との対比が難しい地域となっている。そのため講義では、河川流路を辿ることで新旧地図を対比させたが、この河川流路も蛇行部分の直線化などの変化が多く見られることを考察した。また、ニュータウンの開発に際しての緑地保全についても取り上げ、現在でも敷地内にサンクチュアリを設け野生動植物の保全に努める小山内裏公園や、首都大学東京との連携のもとに緑地保全が進められてきた松木日向緑地等の例について考察した。

② 講義 歴史分野

八王子市にある絹の道は「浜街道」とよばれ、東山養蚕地帯で産出され、八王子に集積された生糸が開港場横浜へと搬出されたルートである。歴史分野では、近世の商品経済・流通網の形成について説明し、開港後の生糸輸出と地域社会の変容との関連性を論じた。

浜街道の発展は地域社会にどのような影響を与えたのだろうか。ここで横浜開港前後の史料読解を行った。一九世紀初めに編纂された『新編武蔵国風土記稿』から、後に生糸商人が成長



明治迅速測図 (明治15年)

史料一

「巽より乾へ通じて一路あり、これ相州鎌倉への往還なり、村内へかゝること十二町ほど、道幅は九尺よりせまき所にては三尺ばかりの所もあり、この村山間にて谷々多く、大抵山谷と平地と相半せり、陸田多くして水田少なし、…」

(一九世紀初『新編武蔵国風土記稿』)

史料二

「養蚕専二仕老々年生糸式貫四百目位平均産ス」(「村内の往還について」八百間巾平均八尺位：八王子宿場より横浜通り脇往還自普請二御座候」

(明治三(一八七〇)年「武蔵国多摩郡村明細帳」)

する鍾水村に関する史料一を提示する。「巽より乾へ」の記述に注目しながら、地理分野で示された鍾水村の地図に重ね合わせると、この道が後に浜街道となる道と類推できるのだが、史料では「鎌倉往還」として説明されている。これに対して、明治三（一八七〇）年の「武蔵国多摩郡村明細帳」（史料二）では村の産業として養蚕と製糸が明記され、道の位置づけが明確に浜街道のそれとなっていることに気づくことができる。加えて、慶応三（一八六七）年頃に作成された「横浜周辺外国人遊歩区域図」を提示し開港がもたらした地域社会への影響の広がり进行を考察させた。

③ フィールドワーク

JR横浜線の片倉駅を起点に、京王相模原線の南大沢駅へと旧浜街道の痕跡を辿った。山城の特色を示す片倉城址では、城絵図や実際の地形観察を交えながら、尾根筋が続く弱点となる城の西側に空堀が設けられていたことの意味を考察した。

鍾水峠に至ると、生糸商人たちの出資によって整備された道了堂跡や石碑等の信仰関連遺構がある。ここで石碑の碑文を読解し、いずれも明治初期に集中するものであることが分かった。この浜街道と生糸商人の隆盛の期間を実感することができた。この周辺は、鬱蒼とした森の中に未舗装路が一キロメートル弱続き、駄載や人力によって生糸が運ばれていた情景を偲ぶことができ

る。未舗装路の終点には一里塚跡に一本榎と庚申塔が立ち、参加者の分析材料には事欠かない。

旧鍾水村では生糸商人の邸宅跡に整備された絹の道資料館の見学、周辺の散策を行い、講義で扱った史料・地図と現在の景観との異同を探った。農村風景の残るこの地域では、かつての谷戸利用の形跡が残る。幕末に日本を訪れた写真家F・ベアトが撮影した鍾水村の写真と比較すると、斜面と道の形からベアトが写真機を構えたであろう場所を推定することもできる。また多摩ニュータウンへと足を運び、鍾水地区において、民間に開発が委譲され戸建て住宅の供給が中心となっていることの観察を行った。さらに旧鍾水村や旧大沢村（南大沢）等ニュータウン建設地域での従前からの集落が、丘陵地の麓の湧水地点に立地していることの観察も行った。

このように生徒自身が文字史料と地図の照合を行った上でフィールドに出かけることで、現地で得る理解をより深いものにする事ができた。

（3）江戸城とその周辺の地形と歴史

① 講義 地理分野

太田道灌が築いた江戸城は、洪積台地と沖積低地の境界部に位置していた。徳川家康入府以降、江戸城の拡張と城下町の整備が行われたが、それは洪水対策としての平川や小石川の付け

替えや神田川の掘削、用地確保のための日比谷入江の埋め立て等、大規模な地形改変を伴うものであった。また、江戸城の拡張による外濠の整備においては、台地に入り込む谷戸地形が巧みに利用される等、江戸のまちづくりが地形との非常に大きな関連の中で進められたことについての理解を深めた。現在の東京は、そうした地形改変の上に成り立っているが、洪積台地と沖積低地をほぼ区切る二〇キロメートル等高線が示された地図への着色を行ったり、家康入府から寛永期の外濠完成までの地図について年代毎の比較を行ったりしながら、将軍のお膝元としての江戸城下町の整備と拡張や、その地理的配置の特色についての考察を行った。さらに、千鳥ヶ淵、溜池等の造成、またその後の玉川上水の整備等と関連させながら、都市住民の生活用水の確保についても考察を行い、現在の東京が抱える課題とも関連させた。

②講義 歴史分野

地理分野で扱った江戸市街の造成を引き継ぎ、建築を主軸に江戸城造成に関わる幕藩体制の特質や、近現代の政治史の舞台としての江戸城周辺を取り上げた。

例えば明治期を代表するバロック様式の建築物である旧司法省庁舎や、一丁ロンドンとも称された三菱煉瓦街は、近代黎明期の日本にとって「欧化」が持った意味について考察する材料

となる。さらに皇居周辺の地図を俯瞰すれば、鹿鳴館があり、日本初のドイツ式庭園である日比谷公園がある。ここで、欧化政策に対する風刺画を示すとともに、中学校までの既習事項である日比谷焼き討ち事件を想起させる。一連の建築を年表の中に当てはめながら、近現代政治史の概観を示し事前学習とした。

③フィールドワーク

東京駅丸の内南口を起点に、皇居・江戸城東面と南面を望みながら、国会議事堂に近い憲政記念館までの道のりを踏査した。丸の内南口での原敬暗殺事件の現場から始まり、駅舎の外面からは辰野金吾の建築様式の特徴を探った。また、東京駅が皇居と正面に相対する場所に設けられていることに気づかせ、都市的施設の配置について考察する場面を設けた。

東京駅周辺ではまた、建築当時の建物をそのままに近い形で



図3 東京駅の建築と立地について考察する

保全している明治生命館、建物の前面（ファサード）部分を残し内部は改築した第一生命館や東京中央郵便局、当時の姿を復元して新たに建てられた三菱一号館美術館等、歴史的建造物の保全・復元がどうあるべきかについての考察を行った。

江戸城跡では、用途に応じた石垣建築の工夫を検討させ手伝普請が持った意味についても考察した。桜田門、旧彦根藩邸、日本水準原点と近現代史の舞台を辿り、最後に参議院の前から国会議事堂が沖積低地から洪積台地を見上げる場所に設けられていることを確かめ、汐見坂から江戸開発以前の海岸線を想像させフィールドワークを終えた。

現地に足を運ぶ生徒は自然と事前の講義で学んだ学習のポイントに気づき、そこからさらに新たな課題を発見する。今回の参加者の多くは入学して間もない一年生であったが、地理的・歴史的な見方や考え方に焦点を当てた事前学習が、生徒の発見する課題を優れたものにし、能動的な学習姿勢の育成に資することを実感した。

おわりに

新学習指導要領における「地理総合」「歴史総合」では、それぞれの見方・考え方や、技能、考察する概念といった汎用的な能力の育成が求められるだろう⁽⁴⁾。その上で、生徒が課題を設

定し、有用な原理や方法論を選択して課題解決に活用する、探究的な学習に接続することが必要となる。共通のフィールドを理解するために、教員二人がそれぞれの概念・知識とともに方法を強調して語る本実践の構造は、原理や方法論の違いから生徒が学習の枠組みを意識し、統合して思考するという、一連の学習プロセスへの発展の可能性があるものと展望を持っている。

本実践はベテランの地理教員のフィールドワークの実践の上に、日本史の若手教員が加わる形で始まった。異動一年目の若手の日本史教員にとって周辺の地域史、関連史料の発掘には負担もあったが、それを上回る喜びがあった。本校は、大学入試を念頭に置いた指導が重視される学校であるが、本実践には受験生である三年生の参加もあり、生徒の持つ潜在的な知的欲求の高さを認識させられた。さらに、生徒のみならず保護者や他教科の教員、教育実習生の参加もあり、次第に協働学習の場に発展したことは、当初の予想を上回る成果であった。

本実践はまだ、地理・日本史の連携に留まっているが、異なる考え方を活用・統合することの有用性に気づいた生徒達が、教科・科目の枠を超えて課題解決に挑むことができるようになることを念願している。それは未来を生きる彼らが、価値観が多様化し流動性を増す社会の中で自律的に課題を発見し、克服して行く上で必要となる資質に他ならないからである。

(1) 第五回高大システム改革会議(平成二七(二〇一五)年八月)では、大学教育を受けるために必要な能力として「問題発見・解決のプロセスを、主体的に実行するだけでなく、他の考え方との共通点や相違点を整理したり、異なる考え方を統合させたりしながら実行していくこと」が指摘されている。

(2) 迅速測図とは、明治初期から中期に陸軍参謀本部によって作成された簡易地図。明治一三(一八八〇)年、山県有朋の命により作成が開始され、明治一九(一八八六)年に完成した。関東地方の一部については農業環境技術研究所の歴史的農業環境閲覧システムを活用することもできる。

(3) 延享三年の「武州多摩郡日野本郷銘細帳下書控」には「一、当村の義は往還宿にて外宿と違い、前後に玉川・浅川これあり、出水の節、御朱印其外御通り候節は、玉川へ川越人足等加勢大勢相懸申し候、右人足の義は達者成もの買立に仕り相勤め申し候故、外宿より入用等の多く相懸り、殊に御大名先年は御通り成され候へ共、近年は御通り御座なく、宿場助成等相成り候事は御座なく候、年々百姓相衰え難儀仕り候、往來の旅人泊りこれあり候ても薪買上候故、曾て助成に相成り申さず候」とある。

(4) 文部科学省教育課程部会「高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム(第五回)」(平成二八(二〇一六)年六月)の試案では、地理総合で習得する知識や技能として「調査や地図や統計などの諸資料から、地理に関する情報を、地理情報システムなどを用いて効果的に収集する・読み取る・まとめる技能」が、歴史総合に関しては「諸資料から歴史に関する情報を効果的に収集する・読み

取る・まとめる技能」が挙げられている。また、地歴科で養成する思考力・判断力として「地理や歴史に関わる諸事象の意味や意義、特色や相互の関連について、概念等を活用して多面的・多角的に考察したり、情報を把握し、その解決に向けて構想したりする力」が挙げられており、各科目での技能・概念の習得と、その活用による考察といった構想が示されている。

(いかわ・かずみ/地理 東京都立八王子東高等学校主任教諭
しまつ・さとし/日本史 東京都立八王子東高等学校主任教諭)